

「言語活動の充実」を軸にした学級・授業づくり開発
—小学校での実践と省察から—

教職実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
堀部 美咲

1. はじめに

(1) 教職大学院に入学した理由

私は「すべての子どもたちの学びをしっかりと保証し、成長を支えてあげることのできる教師になりたい」という思いから、現場に出た時に即戦力となれるような「学級づくり」「授業づくり」の実践的指導力をつけるため、教職大学院に進学した。

大学院の2年間で、学級づくり、授業づくりの指導技術や理論をいろいろな立場の先生方から学ぶことで教師としての視野を広げることができ、多くの小学校・中学校の学校現場で経験させて頂いた実習では、地域や子どもの実態に即した指導のあり方や1年間の見通しを持った教育のあり方等、実践的な教師力をつけることができた。ご指導をして頂いた先生方に、心から感謝を申し上げたいと思う。

(2) テーマ設定の理由

私は相手の立場に立って考え、お互いのよさの受容や共感で仲間とつながれる子どもを育てたいと思っている。そのために、学級づくりや授業づくりにおいて「言葉の力」を育むことを何よりも大切にしていきたいと考えている。子どもたちがよりよい関係をつくり、関わり合い学び合うためには、「話す力」「聞く力」（読み解く力、書く力）等の「言語力」を日々の学級経営や授業の中できちんと育てる必要がある（2章でも詳しく述べる）。学級づくりの中でそれらの力を育てるためにどのようなことができるのか、国語の授業ではどのような学習過程と単元構想で育むことができるのかを明らかにしていきたいと思い、テーマを設定した。

2. 「言語活動の充実」とは

(1) なぜ「言語活動の充実」なのか

平成23年度から実施される新学習指導要領では新しい教育課程の指針が示され、総則に「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」（傍線部堀部、以下同じ。注1）として、教育課程全体を貫く「言語活動の充実」が、重要な教育視点として明記された。

実際に、実習の中でも子どもたちの言語力育成の重要性を感じる事が多くあった。自分の気持ちを

上手く言葉で伝えられない、相手の気持ちが想像できないために仲間とトラブルを起こしてしまう子、言いたいことを言うだけで人の話が聞けず、考えに深まりが見られない子、鋭い観点で意見をもつことができるのに意見交流でずれてしまいがちな子、自分の意見に自信がなく、すぐ周りに影響されてしまう子。子どもたちの思考力・判断力・表現力を育み、子ども同士が豊かにコミュニケーションをとれるようにするために、そして「確かな学力」を保証するためにも、言語力育成のための「言語活動の充実」が大切であると考える。

(2) 到達目標と学習過程の明確化

「言語活動」と言うと、子ども主体の発表会や話し合い活動、交流活動等の活動が浮かびやすいが、それらの活動は学習指導要領が改訂される前にも、学級経営や授業の中で行われてきた。改めて「言語活動の充実」が学習指導要領の改訂の要点としてあげられてきた背景を考えると、「言語活動の充実」とは、今までの子ども主体の活動に重きを置いた評価が曖昧な指導ではなく、その活動によって「どんな言語力が、どの子どもに、どのように身についたのか」「どのように習得が活かされ、また活用・探究に生きるのか」という到達目標・評価基準と学習過程を明確にした指導をしていくことだと考えられる。

「子どもに身につけさせるべき言語力」と「それを具現化した楽しく必然性のある学習活動」を意識し、言語力の習得から活用・探究までの段階と系統を意識した学習活動を組むことが「言語活動の充実」と言える(注2)。

(3) 中心は「論理的な言語力」の育成

「言語活動」の中でも新学習指導要領で特に重視されたのが、論述・説明・要約・レポート作成、振り返り、討論・議論、批評、創作、読解力等「論理的な言語力・コミュニケーション能力」育成のための言語活動である。

それらの言語活動は、教科だけでなく、全教科・領域・活動で児童生徒に教えていくことが新学習指導要領総則に明記され、強調されている。論理的な言語力育成は、各教科の授業場面に限らず、学級活動の面で、学習のルール指導・規範意識、論理的な文章指導・話す聞く指導をしていく必要がある。

3. 本稿の目的と方法

本稿では「『言語活動の充実』を軸にした学級・授業づくり」と題し、子どもたちに「確かな学力」を保証するために、「習得」「活用」の学習過程とつけるべき言語力を明確にした学級づくり・授業づくりを提案していく。

また本稿は修了報告書でもあるため、テーマに沿いながら実習の中で何を学んだのか、学んだことが教師になったときどのように発展性をもつのか、①実習における実践の報告と省察②教職大学院での学びの成果の報告③今後の教師生活への抱負等も述べる。

4. ポートフォリオの目次

2年間の学びを『学習の記録』（ポートフォリオ）の形式で残した。以下はその目次である。

I	イメージを描いてみよう
II	学修を振り返る
III	授業科目を横断的視点から振り返る
IV	教師力向上実習について
V	描いてみましょう—理想とする児童生徒像・教師像—
VI	学校サポーター ・実習記録
VII	特別課題実習…現代的教育課題への対応力 ・計画書・実習記録・報告書
VIII	教師力向上実習 I …学級経営力と人間性育成 「心を伝え合う学級づくり—スピーチ活動を通して—」 ・計画書・実習記録・報告書・資料
IX	教師力向上実習 II …授業力向上とカリキュラム開発 「『習得』『活用』学習過程とつけるべき言語力を明確にした民話の授業開発 —『木かげにごろり』（東京書籍、3年下）を例に—」 ・計画書・実習記録・報告書・資料
X	教師力向上実習 III …同僚性・共同的学校経営、教師力の確認 ・計画書・実習記録・報告書・資料
XI	多様なフィールド実習 ・計画書・実習記録・報告書
XII	大学院の講義での学びの記録 レポート課題

5. 学級づくり実践—“心”を受けとめ伝える—

実践テーマ

心を伝え合う学級づくり—スピーチ活動を通して—

(1) 子どもの実態と実践のねらい

① 子どもの実態

対象は小学校3年生（6月）の児童。休日に出かけたことや朝ご飯のこと等、日常生活のことを朝の会で話すスピーチ活動に意欲的に取り組む子どもが多い。しかし、「知って欲しい、聞いて欲しい」という思いはあるものの、仲間に伝わるように話す方法が分かっていなかったり、仲間がスピーチをしているのに他ごとをしたり、「聞く」体勢が十分にとれていない子どもがいる。子どもたちのスピーチ活

動への意欲を大切にしながら、相手に伝わるように「話す力」や「聞く力」を育み、互いのことを発見し合えるより充実したスピーチ活動を行わせたいと考えた。

② 実践のねらい

スピーチ活動を通して、仲間のよさに気づき、仲間について理解を深めさせたいと考えた。そのために、以下の「言葉の力」を身につけさせることが必要であると考えた。

- (1) 自分の思いが伝わるように話す力
- (2) 仲間の話を一番伝えたいことは何かを考えながら論理的に聞く力
- (3) 仲間のスピーチの良さを認めながら、共感的に、豊かに聞く力

またスピーチ活動を通してこれらの力を育むことで、自分の話をしっかり聞いてもらえる安心感や、「学級の仲間に話したい」「仲間の話を聞きたい」という意欲を高めることができ、豊かな心で話し合い聞き合える、心を伝え合う学級づくりが実現すると考えた。「自分の話をしっかり聞いてもらえる安心感」や仲間の発言を聞こうとする態度は、学習規律づくりの上でも重要である。

(2) つけるべき言語力

上記(1)②であげた3つの言語力を評価するためにさらに具体的に示し、「習得」から「活用」の段階にあわせて【表1】のように設定した（注3）。

【表1】「話す力・聞く力」の「習得」から「活用」

学習過程	つけるべき言語力	到達目標（評価基準）
習得	聞く力 正確に聞く	①良い姿勢で、相手の方を見て聞くことができる（聞く態度）。 ②大切な言葉を落とさず聞き取りメモすることができる。 ③発信者が一番伝えたいことを、内容＋判断のキーワードで表すことができる。
	話す力 伝えたいことを論理的に話す	①相手に伝わる話し方（声の大きさ、速さ、目線）をすることができる。 ②伝えたいことを、論理的な構成で組み立てることができる。
活用	聞く力 仲間の発表に対して自分の意見を持ち、発信するために聞く	①初めて知ったこと、すごいと思ったところ、分からない・もっと知りたいと思ったことを具体的に指摘することができる。 ②仲間のスピーチの良さが分かる。
	話す力 相手や条件に応じて話す	与えられた時間の中で、伝えたいことを効果的に伝えることができる。

(3) 指導の流れと言語活動のポイント

上記(2)であげた言語力を育成するため、以下の指導を行った。スピーチのテーマは、「ぼく・わたしのたからもの」に設定した。

①教師によるモデルスピーチ

(言語力→【話す力の習得】①②)

スピーチ原稿を書かせる前に、朝の会に教師の「たからものスピーチ」をモデルスピーチとして2回行った。「はじめ・なか・おわり」の論理的な文章構成で、話す速さ、声の大きさ、目線、間の取り方、スピーチの始め方と終わり方や「たからもの」の見せ方まで、子どもたちがスピーチを行っていく際のお手本になるように心がけてスピーチを行った。

②スピーチ原稿の工夫

(言語力→【話す力の習得】②)

「はじめ・なか・おわり」の構成で、200字～300字程度で書けるような原稿用紙を作成し、1時間でスピーチ原稿を書かせた(資料1)。「『はじめ・なか・おわり』の構成で書くことで、話し手は伝えたい事柄をはっきりさせることができ、聞き手にも大切なことが伝わりやすい」と、論理的な文章構成で書くことのよさを伝えながら構成の仕方を教えた。字数を統一することで、スピーチの時間を1分前後にすることができることも伝えた。

また「はじめ・なか・おわり」の段落に何をどう書けば良いのか、教師のモデルスピーチを原稿用紙の上部に例示した。

③話し方、聞く態度を意識させるルールを設定

(【聞く力の習得】①, 【話す力の習得】①)

自分の話をしっかり聞いてもらえる安心感や、「学級の仲間聞いてもらいたい、話したい」という意欲、「もっと仲間の話を聞きたい」という意欲を高めていくためには、「話す・聞く」体勢を整えていくことが必要である。

「よい話し方」「よい聞き方」とはどういうものか、子どもたちの普段のスピーチ活動の様子を撮影したビデオを見せて考えさせた。ビデオを見る前に「声の大きさ」「姿勢」「態度」「目線」等に注目して見るよう観点を伝えた。また、教師のモデルスピーチでの話し方も参考にさせた。

子どもたちが意見を出したよい「話し方」「聞き方」を「スピーチのルール」として学級全体で共通確認した。この「話し方・聞き方のルール」に気をつけながらスピーチ活動を行えるように、スピーチが始まる前にルールを書いた画用紙を毎回掲示し、繰り返し意識をさせていった。

④スピーチのメモをとり、話す・聞くの自己評価を

(【聞く力の習得】①②③, 【話す力の習得】①)

「スピーチカード(紙面の関係で省略)」を作り、仲間のスピーチを聞いて新しく知ったこと、発見したことをメモさせた。仲間のスピーチで一番伝えたかったこと(話題の中心)や、スピーチを聞いて初めて知ったことを一言ずつ書いていくように、教師のモデルスピーチの内容を例にメモの取り方を指導した。話題の中心をキーワードで書く子もいれば、スピーチを聞いて感じた仲間の良い所を書ける子もいた。

また「スピーチカード」には、自分のスピーチの話し方、聞き方を振り返ることができる自己評価の欄を設け、「話す・聞く」の意識づけも同時に行っていた。毎朝のスピーチで話し方・聞き方の観点を意識させることで、「話し方・聞き方」を定着させていった。

【子どもたちが提案した「話す・聞く」ルール】

話すときのルール

- ・なるべく紙を見ないで、聞く人の方を見て話す。
- ・後ろまで聞こえる声の大きさと話す。
- ・はっきりと、ゆっくり話す。

聞くときのルール

- ・話している人の方を見て聞く。
- ・よいしせい(せすじピン、手はひざ)で、他ごとをしないで聞く。
- ・スピーチが終わったら、はく手!

⑤仲間のスピーチに対して自分の考えを持たせる活動「発見の実(み)」(【聞く力の活用】①)

仲間のスピーチを聞いて発見したことを「発見の実」に書くという活動を行った。仲間に対する「初めて知ったこと」を一文で書く子どもが多い中、「初めて知ったこと」から一歩踏み込んで、スピーチを聞いて自分が感じた仲間の「よさ」を書いている子どもがいた。その子どもを取り上げ評価すると、多くの子がその子どものカードを参考にして「～なんて、〇〇ちゃんは優しいね」「今度～してね」と、スピーチを聞いて感じた自分の気持ちや考え等を書くようになった。また「～はどうして?また教えてね。」等「分からない・もっと知りたいと思ったこと」が書けている子どもの感想も取り上げ、自分の考えをもつ時の観点を示していった。

子どもたちが書いた「発見の実」は、「みんなが友だちのことを発見すればするほど沢山の実をつける、3年1組でしか育たない珍しい木」である「発見の木」に貼らせた。「発見の木」を子どもたちの目が届く位置に掲示し、いつでも発見の実を読めるようにしておいた。「あ、わたしのこと書いてある!」と嬉しそうに自分のスピーチに対する感想を読む子どもたちの姿が見られた。

(4) 実践の成果と今後の課題

①実践の成果

ア、全員がスピーチ原稿を書くことでつける
学力・意欲

教師のモデルスピーチの文を例示し、論理的な構成の書き方を示したシートを用いたので、文章を書くことが苦手な子どもも1時間の授業でスピーチ原稿を書くことができた。論理的構成で分かりやすく話す力は、書く力と関連させてこそ身につけることができる。

イ、仲間のスピーチに対して「自分の考えをもつ」
ことができた。

仲間のスピーチを聞いて「発見の実」を書く活動と評価を通して、「自分の考えをもつ」とはどのようなことか、子どもたちにその観点を学ばせることができた。仲間の発表内容に対して、まずは「初めて知ったこと、すごいと思ったところ、分からない・もっと知りたいと思ったこと」を言えることが大切で、全員ができるようになって初めて話し合いや学び合い等の交流活動ができるようになるのである。

ウ、「聞くこと」の楽しさ「話すこと」の
楽しさを実感させることができた。

スピーチ活動の振り返りでは、「友だちのことを沢山発見できてよかった」「みんなの宝物を知ることできて嬉しかった」等の、仲間の話を聞くことの楽しさ・仲間を発見することの喜びに気づいた感想や、「皆が私の話を一生懸命聞いてくれて嬉しかった」「～さんに自分のことを発見してもらえて嬉しかった」等、仲間の前で話すことの楽しさ・自分のことを知ってもらうことの喜びに気づいた感想が見られた。

スピーチ原稿を書かせることで内容面を意識させ、「話す・聞く」の中でも特に「聞く」姿勢

や態度を重視した。その結果、話しやすく聞きやすい雰囲気生まれ、自分の話を聞いてくれる安心感の中でスピーチ活動を行うことができたと考えられる。

エ、仲間の「よさ」に気づき、仲間とつながる
うとする態度を育むことができた。

スピーチを聞いた感想（発見の実）に、仲間の「よさ」に気づいた感想や、自分と友だちと結びつけて発見する感想、仲間へのメッセージ等、今後の人間関係につながる感想を書く姿が見られた。仲間の意見を聞いて自分の考えを持つ観点を学び、それを伝えることで、仲間とつながっていく要素を見出し、人間関係を広げていくきっかけがつかうことができていた。

②今後の課題

ア、国語科の授業とつながるスピーチ学習を

今回の実践は、学級づくりを学ぶ実習の中で行った実践であり、スピーチ指導を単独で行ったため、朝の会や朝読書の限られた時間の中での指導をすることの難しさを感じた。スピーチ活動が定着するまでは、スピーチを単独で行うのではなく、言語活動の軸となる国語の授業と連動してスピーチ学習を行っていくことが有効であると考えられる。

イ、即時交流の時間をつくる

スピーチカードにメモをとっていたものの、スピーチを聞いてから時間が経ってしまったから感想を記入したため、スピーチを聞いた時の新鮮な感動や体感が「発見の実」記入の際に生かせなかった。3年生という時期の子どもは、耳で聞いただけの情報はすぐに忘れてしまう。今後スピーチで交流活動を行う際はスピーチ後すぐに仲間に感想を伝え、仲間からの感想が返ってくるように交流の時間を設ける等の工夫をしていきたい。

【資料1】「スピーチ原稿」
一論理的で個人的な情報発信の方法を学ぶ学習シートである。

「はじめ・なか・おわり」それぞれの段落に、
①何を書けば良いのか
②例として教師のモデルスピーチの文を、原稿用紙の上部に示した。そうすることで全員が書くことができた。

おわり	な	か	はじめ
てこでし れいれい モコ きたか らも大 切にす すし	かま元す もし集て て出さ れくつ れくつ まてう まてう まてう まてう まてう まてう	理たる一 由かこと から心 書もに こが うこ うこ うこ うこ うこ うこ	のな○ いれい るもの 犬のモ コです たわは ののの 子年 の族の ののの ののの ののの ののの
りかよ らうせ もにイ ななト わクわ とにロ びのズ をいも かこ んこキ べれる	としく らきた が毎 がアン テン のた こと なご か れとし けい り のし な の	もよ いとし もン うわ まき ら夕 な 色 た のし な の り た か すの は	○な にに につ いて 話 すの かを 書こう うた うた うた うた うた うた

だい
ほく・わたしのたからもの

6. 授業づくり実践

—民話を楽しみ考えを発信する—

実践テーマ

「習得」「活用」の学習過程と言語力を明確にした
民話の授業開発
—「木かげにごろり」（東京書籍、3年下）を例に—

(1) 子どもの実態と実践のねらい

①子どもの実態

対象は、小学生3年生（10～11月）の児童。本を読むことが好きな子どもが多く、休み時間にファンタジーや推理小説、自然科学の本やクイズの本を読んでいる姿を見かける。一方、図書室や学級文庫にある日本の昔話シリーズや世界の伝承物語を進んで手に取る子どもは少ない。「民話」を読むことの楽しさに気づかせ読書の世界を広げたいと考えた。

②実践のねらい

ア、小学校で民話を学ぶ意義

民話とは、昔から人々の間で語り継がれてきた昔話等の話である。今回の学習指導要領改訂の要点に、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」があり、国語科の指導事項に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。低学年から「昔話や神話・伝承など」に触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成が重視されている。「民話」でどのような言語力をどのように身につけさせるのか、「民話」の授業開発を行っていきたいと考えた。

民話には生きるための〈知恵〉やく〈勇気〉が描かれており、必ず事件や出来事には因果関係が設定されている。それらの行動の事実を論理的に読み取る力は、日常の人間関係の上でも重要であり、コミュニケーションの基盤としての言語力でもある。

「民話」の読み方を楽しく教えることで、読書や生活に生かせる言語力を育むと共に、「平家物語」等の中学校・高校で学習する伝承古典に対応できる学力を育むことができると考える。

イ、目標

以下の単元目標を設定し実践を行った。

- (1)民話のおもしろさを味わい、進んで世界の民話を読もうとする。
(関心・意欲・態度)
- (2)繰り返されることばや表現、場面の移り変わりや出来事の変化に気づきながら読むことができる。(読むこと)
- (3)他の民話を読み、そのおもしろさが伝わるように紹介文を書くことができる。(書くこと)

(2) つけるべき言語力

本実践では、「習得」から「活用」の学習過程と、各段階でつけるべき言語力を【表2】のように捉え、単元を構成した(注4)。

「習得」の学習段階では、「民話」の読み方を身につける国語科固有の言語力を、「活用」の段階では、全教科に通じる「論理的な文章を書く力」と、相手に分かりやすく伝え、相手の話を聞く「発信・交流の力」を身につけさせ、「習得」「活用」の学習過程を明確にした民話の授業開発を行った。

(3) 指導の流れと言語活動のポイント

【習得】②基本学習では、次の5つのポイントを踏まえて授業を行った。

- (1)テーマ・人生の知恵を読むことを教える。
- (2)始めと終わりで中心の出来事が変化することを教える。
- (3)場面のうつりかわり、ストーリー展開の面白さを読み取らせる。
- (4)会話文や「ごろり」などの言葉の繰り返しやリズムの面白さに気づかせる。
- (5)「お祭り」などの背景になっている知識を教える。

【表2】「習得」から「活用」の学習過程と、各段階でつけるべき言語力

学習過程・段階	各学習段階でつけるべき言語力	「木かげにごろり」の評価基準(到達目標)
習得	①基礎学習 音読、話す・聞く、メモやノート、語彙力等、すべての教科の基礎となる学習段階	①すらすらと正確に音読できる。 ②漢字・語句の意味が分かる。
	②基本学習 教科書・資料等の「言語・非言語情報」を正確に読み解く言語力をつける学習段階であり、教科固有の基本となる学力をつける学習段階	③民話の特徴が分かり、読み方を理解する。 ④場面の組み立てが分かる。 ⑤人物・出来事の変化ときっかけが分かる。
活用	①発展学習 自分の立場から「考えを持つ」「論理的に構成する(書く)」言語力をつける学習段階	⑥話の「面白いところ」と理由を考えることができる。 ⑦紹介文を「はじめ・なか・おわり」の構成で書ける。
	②発信・交流学習 目的・相手・場面・条件等に応じて話す、聞く、論理的に伝え合う「交流・学び合い」の言語力を身につける学習段階	⑧論理的構成で書いた紹介文を仲間に伝える。 ⑨仲間の紹介文の良いところが分かる。
評価・一般化学習	課題追究につながる学びの一般化、経験や生活、読書力に生かす「評価・振り返り・課題追究」の言語力をつける学習段階	⑩①～⑨について振り返り自己評価することができる。 ⑪各教科の学習や読書力に生かすことができる。 ⑫生活の中から課題を見つけ意欲的に解決することができる。

①民話の読み方を学ぶ (【習得】②基本学習)

子どもたちの初読の感想で出た民話の面白さを以下の3点にまとめて、民話を読むときのポイントとして押さえた。

- 1.言葉やリズムのおもしろさ
- 2.出来事の変化のおもしろさ
- 3.知恵のおもしろさ

②民話の構成に気をつけて読む

(【習得】②基本学習)

上記の民話を読むときのポイントの2・3を学ばせるために、「木かげにごろり」の読みとりでは以下の三点を中心に指導をした。

- 1.「木かげにごろり」の状況設定を読む
- 2.変化のきっかけとなる出来事をおさえる
- 3.地主とお百姓の立場の変化を読む

③学習シートでの学習 (学習シートは紙面の関係で省略)

「木かげにごろり」のあらすじと構成が一目で理解できるような学習シートを開発した。長い文章構成が一目で分かり、構成や場面の移り変わり、出来事の変化がとらえやすくなると考えた。

④「民話」への関心を高める教室環境作り

「木かげにごろり」での学習を通して「民話」の面白さに気づいた子どもたちの意欲を読書につなげたいと思い、図書室から世界各国の民話を40冊ほど選んで借り、学級文庫に「世界の民話コーナー」を設置した。朝読書や放課の時間に民話を読む子どもたちの姿が見られた。

⑤論理的構成で民話の紹介文を書く。

(【活用】①発展学習)

【習得】の「木かげにごろり」を通して学んだ民話の「読み方」を生かし、読書活動につなげるために新しく民話を読み、その魅力を分かりやすく発信する(書く・話す)学習を行った。民話を読んでその面白さを伝える「紹介文」を「はじめ・なか・おわり」の論理的な文章構成で書かせた。それぞれの構成について以下のように書くよう指導した。

- ①「はじめ」には本の題名、作者、国の名前、どんな話かが分かるあらすじを一文でまとめる。
あらすじは、「何(人物やできごと)が、どういうきっかけで、どのように変わったか」をまとめると、相手に話がより分かりやすく伝えられる。
- ②「なか」には、面白いところ(言葉や場面、人物など)を理由と一緒にできれば2つ書く。
- ③「おわり」には、本を読んでこれからしていきたいと思うことを書く。

初めて読む話の紹介文をいきなり書かせるのではなく、まずは「木かげにごろり」をモデルとして紹介文を書き、あらすじのまとめ方の確認をした。

また「なか」に書く話の面白さについて、全ての子どもに自分の考えを持たせるために、民話の読み方学習で押さえた観点(言葉のリズム、繰り返しの表現、出来事の変化等)で書くことを確認した。

スモールステップとして、教科書教材を発信のモデルにすることで、構成の仕方や、自分の考えを持つ際の観点を確認することができる。

次に、韓国民話「三年とうげ」の読み聞かせを行い「三年とうげ」の面白さを伝える紹介文を書くという活動を行った(資料2)。

「三年とうげ」は初めて読む話であるため、子どもたちがあらすじをまとめやすいように、三択クイズ等で「三年とうげ」の状況設定を確認した。そして「舞台」や「はじめの様子」「変化のきっかけ」「終わりの様子」が分かるようにイラスト等を用いて黒板にまとめ、黒板を見てあらすじをまとめることができるように板書を工夫した。

⑥「三年とうげ」紹介文の発表

(【活用】②発信・交流学习)

数人の子どもたちに、書いた紹介文をみんなの前で発表させた。変化のきっかけをとらえてあらすじをまとめている子、言葉の面白さに気づいている子、病気のおじいさんが最後には幸せに長生きするという変化に着目している子、子どもたちが書いた紹介のよさを簡潔に評価し、今後の学習のために自分の考えを持つ際の観点を示した。

⑦学習の振り返り (評価・一般化学習)

単元を通してどのようなことを学んだか、子どもたち自身が自覚できるように、「木かげにごろり」と「紹介文を書こう」の学習の振り返りを学習シート(紙面の関係で省略)で行った。学習の感想として①授業で初めて知ったこと・分かったこと②授業の中で楽しいな・面白いなと思ったところ③これからもっと学んでみたいと思うことについて一行ずつ書かせた。振り返りの文章も発表させ、学んだことのキーワードを使って書けている子どもを評価した。

(3) 実践の成果と課題

①実践の成果

ア、民話の「読み方」を教えることで、読む楽しさを発見する

授業の感想を見ると、「はじめ」と「おわり」で地主と百姓の立場が逆転したことを発見した時に、民話のおもしろさを感じたという子どもが多かった。また、休み時間に「世界の民話コーナー」の民話を読んで、「先生、このお話も、このお話も、みんな始めと終わりで逆転しているよ」と、目を輝かせて報告し

てくれた子どももいた。

民話の読み方を教えることで、子どもたちは民話を読む楽しさを発見し、読書の世界を広げることができることが分かった。

イ、開発した学習シートの有効性

学習シートを作る際に次のことに気をつけた。

- ①何を学習すれば良いかが目に見えるようにすること
 - ②学習の振り返りができるような項目をつくること
- これにより、自分は何を学習したのかをはっきりと言葉で理解することができ、「民話の読み方が分かって楽しかった」等、今後の意欲にもつながる「メタ評価能力」を高めることができた。

ウ、「習得」から「活用」までの段階を踏んだ学習過程の有効性

習得①基礎学習（民話の特徴・構造の理解）→習得②基本学習（民話の読み方の観点の理解）→活用①発展学習（読み方の観点を生かして自分の立場から考えを持つ、論理的に構成する）→活用②発信・交流学習（目的・相手・場面・条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う）→評価・一般化学習（経験や生活、読書力に生かす評価・振り返り・課題追究）といった、段階を踏んだ学習過程で学習を進めたことにより、子どもの実態に合わせて「理解」から「発信」までの学び方を身につけさせることができた。こうした「どの段階でどのような力をつけるのか」を明確にした学習過程で学習を進めていくことにより、漠然とした教材の読解に終わらず、本の紹介スピーチや日常の読書活動へと発展させることができ、子どもの読書力や発信・メタ評価能力を伸ばすことができると考えられる。

②今後の課題

ア、子どもの発達段階・実態を踏まえた授業を

学習シートでの学習に慣れていないこともあり、子どもたちにとって、学習シートと教科書を両方使って作業させることは難しかったようだった。本文からキーワードを探させる時は、教科書に丸をつける、囲む、色で線を引く等、指示・発問にメリハリをつけながら、まずは教科書だけを使って学習をするステップが必要であった。


また「民話紹介カード」では、行の線が無かったため、子どもたちは行を揃えて書く、字の大きさや形に気を付けて書く、ということができなかった。

子どもの発達段階や実態をよく把握した上で、指導や教材開発を行っていけるようになりたい。

イ、振り返りから授業をつくる

授業の最後に、学習の振り返りとして、学習課題に対する自己評価と「今日授業で分かったこと」「考えたこと」を一行で学習シートに書かせた。しかし、毎時間振り返りをする時間がとれた訳ではなく、自己評価だけで終わってしまうこともあった。

「分かったこと」「考えたこと」を1時間の流れを思い出しながら言葉でまとめさせる活動によって、学んだことをすぐ忘れてしまう子どもたちにも学習内容を定着させることができる。また「この授業で何を学べたか、どんな力がついたのか」が子どもたちにとって明確で実感を伴った学びとなるため、今後の学習意欲を高めることができる。1時間の授業の中でのキーワードを示して、その言葉を使って振り返りをさせる学習も有効である。振り返りを大切に授業をしていきたい。

おわり	な	か	はじめ
<p>○お話を読んで、これからやっていたことと書きました。</p> <p>みなさんも、ぜひ読んでみてください。</p> 	<p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p>	<p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p>	<p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p> <p>○お話のおもしろさ、人柄や状況、場面、条件等に応じて話す聞く、論理的に伝え合う。</p>

【資料2】
「民話の紹介文」
←民話の面白さを伝える文を論理的に書き、分かりやすく伝える技術を学ぶ学習シートである。

「はじめ・なか・おわり」それぞれの段落で

- ①何を書くのか
- ②書くときの文型

を、シートの上部に示した。そうすることで、全員が書くことができた。

7. 2つの実践を通して学んだこと

—「言語活動の充実」を軸にした学級・授業づくりとは—

(1) 求められる教師の言語力

—教師の言語力が子どもの言語力を伸ばす—

子どもは、教師の行動をよく見ていて真似をする。1つ目の実践でモデルスピーチをした際、私の話を真似して書く子どもたちが多かった（話の内容は似ていても、きちんとその子らしいエピソードや表現で書かれていた）。日頃のちょっとした話でも、教師が構成を意識して話すことで、子どもは話の構成を意識するようになる。

また、教師は様々な場面で子どもを「評価」することが求められる。この時、子どもの学びを正確に見取り、今何が課題なのか、その子らしい発見はどこか等を判断して返すには、到達目標と評価基準を明確にしておくが必要になる。教師自身が学習内容について指導のポイントと明確な評価基準をもっていないと、適切な指導も評価もできない。

子どもたちに「言語力」を育くむ前に、教師自身に論理的に話す言語力や授業を構成する上での言語力を身に付けることが求められるのだと感じた。

(2) 学級経営と授業づくりの相互関連性

二つの実践を通して、学級づくりと授業づくりの相互関連性を強く感じた。学級経営と授業のどちらか一方に力を入れても「言語力」を育むことは難しい。「言語力」は両者を相互に関連させていくことで育むことができるのだと感じた。

学級経営→授業

「意見を言い合える人間関係」や、「話す人の方を見て話を聞く姿勢・態度」、聞き手に伝わる声の大きさ、速さで話す等の「人に伝わるように話す態度」ができていないと、授業での活発な意見交流は実現しない。自分の話を学級の仲間に聞いてもらえる安心感は、授業中の発言等の学習意欲につながる。学級経営は授業の土台となる人間関係やコミュニケーション、規律、言語力の基礎を育む場である。

授業（国語科）→学級経営

国語科の授業で育む「相手の伝えたいことは何か考えながら聞く力」「相手の気持ちを想像する力」「相手に気持ちを伝えるコミュニケーションの方法」を学級での様々な活動（朝の会のスピーチ、班活動、話し合い活動等）に結びつけることで、それらの力を定着させていくことができる。

(3) 言語環境の整備

話す・聞く時のルールを、始めは多少形式的でもいいから徹底して意識させる。仲間の話を聞く楽しさ、話を聞いてもらえる嬉しさを味わうことができ

ると、子どもの姿勢は変わってくる。

この規律を整えていく時に、話を聞く時の姿勢や話し方、意見を言うときの話型等、学習参加の仕方を意識して学べる掲示物を作ると、さらに子どもの意識や意欲が高まることが分かった。

またどの教科でも、今学習している内容と関連した本を子どもは興味を持って読んでいた。学ぶ内容と関連した本を学級文庫に置くことも有効であることが分かった。

言語力育成のためには、話す・聞く時の規律づくりや、学ぶ内容に合わせた掲示物の工夫や学級文庫の整備といった教室環境づくり等の、「言語環境の整備」が重要であることを学んだ。

8. 教職大学院の2年間で学んだこと7項目

(1) 学級づくりの観点から

①学級を安心感のある「居場所」に

学級は子どもたちが一日の大半を過ごす場所である。その学級が居心地のいいものでなかったら学校に来るのがつらくなってしまふ。だからこそ、教師は子どもたちにとって安心感のある「居場所」となるような学級をつくっていかねなければいけないことを学んだ。「安心感」と「居場所」をキーワードに、学級開きや学級目標決め等の様々な学級活動や、学級掲示物の工夫をしていきたい。

②集団を高める指導の大切さ

—集団の高まりが個を変える—

課題をもつ子や集団になじめない子に対する支援・指導は、その子に対して個別に行うだけではその子を変えていくことは難しいと、講義や実習の中で学んだ。集団になじめたいけれどなじめない、困っている子どもは、教師からの呼びかけよりも、仲間からの真剣な呼びかけに応えようとする。周りの子どもの「集団」としての意識を高め、周りの子どもたちがその子に呼びかけていく学級集団づくりが大切なのだ学んだ。周りが変われば個人も変わることを頭に入れて、ねらいをもって様々な活動を仕組み、評価し、学級集団を高めていく指導をしていきたい。

③保護者との連携

子どもだけでなく保護者に信頼される教師に

実習中に学んだ学級経営において大切なことの一つに「保護者との付き合い方」がある。実習で、「子どもの後ろには必ず親がいる。いくら子どもに一生懸命指導をしても、その子の保護者に信頼されていなければ指導は行き届かない。」と教えて頂いた。「子どもをより良い姿にしていきたい」という願いは教師も保護者も同じである。学級通信等で教師の願いを伝えたり、子どもの様子を伝えたりして連絡を密に取り、保護者と信頼関係を築きながら学級経営をしていきたい。

(2) 授業づくりの観点から

①評価基準を明確にしたカリキュラム開発

「この授業で何を学ばせるか」「どんな力をつけさせるか」等、評価基準を明確にすることで、子どもの学びを正確に見取り、その子らしい発見はどこか、課題は何か等を判断することができる。そして授業の中で子どもに適切な声かけや支援、評価ができるようになる。

また評価基準を明確にすることによって、1時間の授業で子どもたちがどこまで理解し、どこが理解できなかったかを教師が把握することができ、自分の授業を反省して次に生かすことができる。1時間で何を学ばばいいかが明確になるため、子どもの学習に対する意欲も高まる。

評価基準を明確化することの重要性を学んだ。

②全員に「自分の考えをもたせる」ことの大切さ

クラスの子全員が「自分の考えをもつ」ことができて初めて話し合いや学び合いの学習活動が成立する。全員に「自分の考えをもたせる」ためには、何に対してどう考えを持てばいいのか、観点を授業の中で教える必要があることを学んだ。

(3) 組織的な学校運営の観点から

①子どもたちの問題行動への対応

問題行動や気になる子への対応は、担任が一人で抱え込むのではなく、学年の先生と相談したり、相談員の先生や養護の先生、教務主任や教頭・校長先生に相談したりして、チームで支援のあり方を考えていくことが大切であると学んだ。

また、子どもの行動の背景には必ずその子なりの理由があることを実習の中で改めて学んだ。問題行動を叱る前に、事実の確認と、理由をしっかりと聞くようにしたい。そして行動をとった時の子どもの気持ちを受けとめてあげたい。その後で、行為を注意する。そして「どうすればよかったのか」「これからはどうしていけばいいのか」を子どもの口から言わせるようにしたい。失敗から子どもたちが素直に学んでいけるように、支援をしていきたいと思う。

②教師間の連携、「よさ」から学べるように

実習の中で、先生方が打ち合わせや学年会、放課の時間に子どもたちの情報交換しながら、一人で抱え込まないように対応を検討している姿を見ることができた。どんな教育も「連携」なしでは上手くやっっていけない。教師と子どもだけでなく、教師と教師の人間関係を上手く築いていくことが大切なのだ学んだ。「連携」を上手くとっていけるように、組織の中でどう動けばいいのかを考えて、人間関係を築きながら仕事をしていきたい。その時に、それぞれの学校の先生方の「よさ」から学ぶ姿勢を忘れずに、多くの先生方の「よさ」を吸収して成長していけるような教師になりたいと思う。

9. おわりに

—大学院での学びを生かして、目指す教師像—

(1) よさを認め合いよさでつながる学級づくり

発達障害をもつ子、国籍の違う子等、様々な個性をもつ子どもたちが一緒になって生活するのが学級である。自分と違う仲間の性質を見つけた時に「違い」を排除しようとするのではなく、相手の「よさ」に目を向けて関わられる子どもを育てたい。

そのためには、大切なことはきちんと言葉で伝える、わかってもらえる表現の仕方や、言葉・眼差しやサインから、正確に豊かに人の心を感じることができる人間的な想像力である「聞く力」等の「言葉の力」を育むことが大切であると実習を通して感じた。今回の実践提案のように、言語力育成を軸にして、お互いのよさの受容や共感でつながる関係づくり、相手の立場に立って考えられる子どもを育てる学級づくりをしていきたい。

(2) 学ぶ楽しさを伝える授業づくり

—知的な発見のある授業を—

教師の子どもに対する責任は、やはり子どもに学力を保証することだと思う。教育のプロとして、全員の子どもの楽しく、きちんと学力をつける、「授業で勝負」できる教師になりたい。

学部の頃、現代文学の研究を通して学ぶことの辛さと共に「読むことの楽しさ」「研究すること、学ぶことの楽しさ」を感じた。

問題や課題に取り組んだり、仲間と関わり合いながら学習したりする中で「わかる、できる」と思った時に、子どもは「学ぶ喜びや楽しさ」を感じることができるのだと思う。

大学院で学んだ教材研究の方法や授業構成、評価や発問等の授業技術を生かして、子どもたちの顔がパッと上がる瞬間のある授業、知的な発見のある授業をつくりたい。そして、自分が感じた「学ぶことの楽しさ」を子どもにも伝えていける教師になりたいと思う。

(3) 子どもたちから学べる教師に

大学院での実習の中で強く感じたことは、「子どもは教師を映す鏡」ということだ。子どもの行動は教師の行動の裏返しだ、と思い、一度自分の行動を振り返ってみると、一方的に子どもが悪いということは殆どないことに気がついた。「ああいう発問の仕方だと伝わらない」「あの指示が徹底していなかった」と反省し、子どもたちから学ばされることが増えた。

教師の言動や行動は学級の子どもの姿によって現れてくる。子どもの反応や様子から自分の学級経営や自分の授業（指示・発問、説明、活動）を日々反省できるような教師になりたいと思う。

子どもから学び、子どもと一緒に成長し続ける教師でありたい。

【付記】大学院2年間の実習は、以下の学校でさせて頂いた。

＜学校サポーター＞＜教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ＞

知立市立知立西小学校（加藤恵一校長先生）

＜特別課題実習＞

豊田市立東保見小学校（新美隆一校長先生）

＜教師力向上実習Ⅲ＞

岩倉市立岩倉南小学校（鈴木義己校長先生）

あま市立甚目寺南中学校（松永裕和校長先生）

犬山市立犬山中学校（長屋勝彦校長先生）

尚、実習中は多くの先生方にご指導ご助言を頂きました。本来ならばお一人ずつお名前をあげるべきですが、省かせて頂きます。お世話になった全ての先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーターで継続的にご指導して下さいました川北稔先生、教師力向上実習Ⅰでご指導して下さいました志賀廣夫・川北稔先生、実習Ⅱでご指導下さいました佐藤洋一・蜂須賀渉先生、実習Ⅲでご指導して下さいました吉田淳・恒川武久・川北稔先生、修了報告書や国語科の授業作りを具体的に指導して下さいました佐藤洋一先生に、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

【注記】

注1 文部科学省『小学校指導要領解説 総則編』

注2 佐藤洋一「全教科等で行う言語活動の充実をどうすすめるか」（高階玲治編集『移行措置への対応ポイント』教育開発研究所・2008.10）

注3 佐藤洋一先生の学習過程論を基に堀部が作成した。

注4 同上

【主要な参考文献】

1. 新学習指導要領関係

(1)文部科学省『小学校指導要領解説 総則編』

(2)文部科学省『小学校指導要領解説 国語編』

(3)文部科学省『小学校指導要領解説 特別活動編』

(4)文部科学省『中学校指導要領解説 総則編』

(5)文部科学省『中学校指導要領解説 国語編』

(6)文部科学省『中学校指導要領解説 特別活動編』

※(1)～(3)（東洋館出版社・2008.8）

(4)・(6)（ぎょうせい・2008.9）(5)（東洋館出版社・2008.9）

(7)文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集

【小学校版】」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301088.htm）・2011.1.12）

2. 「言語活動の充実」に関わる文献

(1)ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著 立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力を 目指して』（明石書店・2006.5）

(2)佐藤洋一「言語活動の充実」（『教職研修 10月号増刊新学校 経営相談12ヶ月 第1巻 学校力を高める教育課程経営』教育 開発研究所・2009.9）

(3)佐藤洋一「言語活動の充実 教育課程の基本的枠組みと教育 内容の主な改善事項」

（『教職研修 2008年2月号』教育開発研究所・2008.1）

(4)佐藤洋一「全教科等で行う言語活動の充実をどうすすめるか」

（高階玲治編集『移行措置への対応ポイント』教育開発研究所・20 08.10）

(5)左近妙子「話し合い・交流学习の評価をどうするか」

（『国語教育臨時増刊7月号』明治図書・2010.7）

3. 学級づくりに関わる文献

佐藤洋一「できる・発見・学びの共有と自覚化」

（『授業研究21』明治図書・2008.2）

4. 国語科の授業づくりに関わる文献

(1)国語教育研究所編「『読書力』を育てる授業改革」

（『国語教育臨時増刊』明治図書・2010.3）

(2)「『伝統と文化』教育で日本文化を見直す」

（『現代教育科学』明治図書・2010.2）

(3)日本言語技術教育学会編「伝統的な言語文化を深める授業 力とは—あなたの言語力で子どもが育つ—」

（『言語技術教育19』明治図書・2010.3）

(4)佐藤洋一「国語科『習得・活用型学力』のステップと授業 改革—論理的思考力・判断力・表現力を鍛える』指導過程 モデル—」（2010 作成）

(5)佐藤洋一「『聞く』『要約』『レポート作成技術』を全員 に」（『教育科学国語教育』明治図書・2009.11）

(6)佐藤洋一・伊藤清英「物語を〈情報伝達のモデル〉にした スピーチの指導—教材『ざうっと ずっと 大すきだよ』からく ありがとうスピーチ>>へ（小学3年生）—」

（『愛知教育大学教育実践総合センター紀要第7号』2004.2）

(7)佐藤洋一・松木尚美「ファンタジー（物語）の「読み方」 の基礎・基本から発信へ—到達目標（評価基準）を明確にした 授業・評価開発（小学校4年生）—」

（『愛知教育大学教育実践総合センター紀要第9号』2006.2）

(8)佐藤洋一「物語の言語技術（読解力）と心を伝えるコミュ ニケーション能力の基礎・基本学習—「お手紙」を例に（アー ノルド＝ローベル/小2教科書物語教材）—」

（平成19年愛知県豊明市立沓掛小学校実践）

5. 国語科教材開発

(1)金森 襄作「こかざにごろり—韓国・朝鮮の昔話」（福音館 書店・2005.09）

(2)李 錦玉「さんねん峠—朝鮮のむかしばなし（フォア文庫）」（岩崎書店・1996.7）

(3)丸田 一美「読むことと授業 『三年とうげ（光村三年上）』 の実践を中心に」（『全国大学国語教育学会発表要旨集101』 全国大学国語教育学会・2001.10）

(4)田中枝利子「『読書が楽しい子ども』を育てるために— 『おもしろさの視点』に気付き、それを次の読書に活用す る読書単元の試み—」（www.juen.ac.jp/educ/renk_ei/zissenke n/ kakoronbun/jissen16/200605.pdf）・2010.1.15閲覧）

(5)深川 明子「小学校国語科教科書における民話教材につい ての考察」（『教科教育研究12』金沢大学・1979.2）